

この人の「人生」という物語を残したい

…重度知的障害のある人たちの支援計画作成に思うこと

平成24年、障害者自立支援法の一部改訂時にサービス等利用計画の策定は市町村の義務とされたが、実は、この策定のプロセスや策定後のモニタリングに重要な価値があると思われる。疎の策定過程こそが利用者にマッチしたプランを検討しつつ、その後のサービスを提供するために欠かせない地域をベースにした支援チームを構築するプロセスに他ならないからだ。よい支援チームを構築し機能させるためにはどんな視点が必要だろうか。私自身の経験をもとに、とりわけ、重度知的障害のある人の支援計画作成プロセスについて考えてみたいと思う。

重度知的障害者の支援計画作成では、本人自身による主張が捉えにくく、支援者や支援チームに主語がすり替わる危険性がある。ケアマネジメントという言葉が流布しはじめたころ、通所事業所のある利用者の支援計画をつくり、それをいきなり行政に持ち込んでヘルパー利用を申請したため、悪徳業者であるかのように警戒されてしまうことがあった。つまり、利用者ではなく事業者の利益を主張していると思われたのである。また、別の利用者の母親は、私に勧められたからサービスを利用するに至ったまでと認識しており、本心では必ずしも望んでいなかったということもあった。これらの経験から、本人からの明確な主張が得られないことを、余程、重大かつ慎重に受け止めなければならないと思い知った。そして、支援チームを構築して様々な認識を共有することがいかに大切かということを学んだ。

しかし、チームであっても利用者とのかかわりの度合いに差があることなどから、特定のメンバーの意見に引きずられる可能性がある。例えば、親や世話人のように長い時間を共有する者は利用者の心情を正しく理解していると思われがちであり、あるいは専門職の知見が選別されることなく迎合されることも少なくない。

重要なことは、このような落とし穴があることを踏まえてチームを運営するということだ。とりわけ、利用者のニーズを分析する段階は注意を要する。ニーズ分析とは利用者等から表出される要求をそのまま受け取るのではなく、その背景を丁寧に探り整理することによって本当のニーズに迫るプロセスのことだ。このニーズ分析を一人の支援者に委ねるのではなく、様々な立場の複数名（支援チーム）の合議で取り組むことが理想的である。なぜなら、重度知的障害のある利用者の場合、どんな支援者のニーズ分析も結局は推測の域を出ないからだ。したがって、様々な支援者によるニーズ分析の総体から妥当と思われるニーズを導き出すという手順が望ましい。

一方、どんな支援を行なうのか、つまり支援内容を検討する段階では利用者の思いだけが優先されるべきではないと思う。もちろん、ニーズを充足することが前提となるが、その満たし方には様々な支援者の思いも反映されることを歓迎してよいのではないか。例えば、両親が子に託したい「ねがい」などだ。あえて言うなれば、障害がなかったとしたら

こんな個性を持った人物になってほしかったという思いや、家族が持っている雰囲気などを継承することだ。また、地域が求める思いを込めるということもあるだろう。地域が抱える課題解決と一緒に担ってほしいとか、その町の特色を身にまとってほしいといったことだ。重要なのは、このような期待を込めた支援計画に、支援チーム全員が責任を持って取り組むことと、複数の支援者による丁寧なモニタリングを繰り返すということだ。モニタリングはニーズ分析同様の手法で取り組めばよいと思われる。

人は経験したことを記憶として保持し、その後、無意識のうちにその記憶を思考に活用しているという。その意味で、様々な経験がその人の生き方や個性に影響を与えているのだろう。それゆえに、知的障害があっても、様々な経験の機会が豊富にあることが重要と考えられる。また、支援者はそれらの経験が印象深く感じられるような（記憶に残るための）支援に努めるべきであると思うのだ。しかし、こうした記憶が忘却されていくことへの支援はあまり取り組まれていない。知的障害の有無にかかわらず、年をとればだれでも記憶力が落ちるものであるが、写真や映像など様々な記録が補助線となって人生が物語のように思い出されるということもある。そして、過去の自分に勇気づけられるということもあるのではないだろうか。したがって、重度知的障害のある人にも、その人にとってわかりやすい記録を残し、振り返る機会をつくる必要があるのではないかと思うのだ。

そのための方法を見出すことはきわめて難しく、このような取り組みが利用者にもたらす直接的な効果を測定することはできない。しかし、支援チームと利用者が一体となって創る歴史が何がしかのかたちで残り、利用者の人物像が受け継がれていくことも大切な意義である。また、「この人の人生という物語をどのように残すか」について考え、具体的に取り組むことが支援チームの成熟にもつながるものと思う。